

上顎右側第二大臼歯の萌出障害を起こした 複合性歯牙腫の1例

比嘉 和、馬場篤子、久保田文恵、三浦崇史、
本川 渉

福岡歯大・成育小児歯

【緒言】歯牙腫は歯の硬組織を主体とする歯原性腫瘍の一種であるが、真の腫瘍ではなく腫瘍様奇形と考えられている。10~30歳代、上顎前歯部、下顎臼歯部に好発し、組織学的に複雑性と集合性とに分類される。今回、齲蝕処置を主訴に来院した10歳女兒において、上顎右側第二大臼歯歯胚咬合面上部に歯牙腫を認めた。歯牙腫の摘出後、長期観察を行ったので若干の考察を加えて報告する。

【症例】患児：10歳10か月 女児

初診日：平成13年12月21日

主訴：虫歯の治療をしてほしい

家族歴：特記事項なし

既往歴：アレルギー（目の充血）

【処置および経過】当科初診後、パノラマエックス線を撮影。右側上顎第一大臼歯遠心部、第二大臼歯相当部に拇指頭大の不透過像、および大小様々な塊状の不透過像を認めた。平成14年2月14日、口腔外科にて局所麻酔下で歯牙腫を摘出し、病理組織検査より複合性歯牙腫であると診断された。1年2か月後、第二大臼歯は萌出を認め、現在、定期的に経過観察を行っている。

【考察】本症例では、初診時にスクリーニングを目的とし撮影したパノラマエックス線写真において、偶然、上顎右側第二大臼歯歯胚上部に歯牙腫を発見した。歯牙腫を摘出後、第二大臼歯の萌出を認めたが、歯根の彎曲や遠心根の発育停止が観察されたことから、長期的な経過観察が必要であると考えられた。

埋伏歯や歯牙腫といった異常の早期発見や的確な診断を行うためには、定期検診時の口腔内診査に留まらず、パノラマエックス線写真などを用いた診査の有用性が示唆された。

下顎両側乳切歯部に癒合歯がみられた小児の 長期観察例

○小笠原榮希、石井 香、岡本佳明、尾崎正雄、
本川 渉

福岡歯大・成育小児

【緒言】乳歯癒合歯は小児歯科領域で多くみられる形態異常である。一般に、単独に発現する場合が多く、左右対称性に発現することは比較的まれである¹⁾。今回演者らは、下顎両側BC部に癒合歯がみられた1例の、長期観察を行ったので報告する。

【症例】患児：3歳4か月 女児

初診日：昭和62年2月14日

主訴：定期的口腔管理、フッ素塗布

全身状態：特記事項なし

家族歴：兄：乳歯癒合歯、乳歯先欠、弟；右上C、
右下3先欠、上顎埋伏過剰歯

口腔内所見：下顎両側BCの癒合を認めた。癒合歯の後継永久歯は、右側に異常は認められなかったが、左側23の癒合を認めた。過蓋咬合を呈していた。

【処置及び経過】上顎左右側4、下顎右側4の抜歯を行い歯列咬合を完成させた。

【考察】乳歯癒合歯を有する症例では、後継永久歯の歯数、形態に異常を生じることが多く、また歯列は狭小化し、永久歯列への成長過程において咬合上の問題や審美的問題を生じる可能性が高い。そして、この影響は乳歯癒合歯が複数存在する場合、特に大きいと考えられる。従って、乳歯癒合歯の存在は後継永久歯の異常を疑い、長期的な口腔管理の必要性を早期から保護者に説明し、適切な処置を行っていかなければならない。

【参考文献】1) 国松仁志、三好作一郎、佐藤敦子、清水 保：乳歯列癒合歯とくに両側性癒合歯について、小児歯誌、32:14-20,1994.